

自然を語る会

『沈黙の春』第4章の読書会

2022年12月10日 10時～12時

参加者 15名

担当 柳沢さん

第4章のテーマは水。食物連鎖や生物濃縮で水に流された汚染物質や合成薬品が回り回って食物連鎖上位の生きものの体に入っていくという話です。本の中ではクリア湖でブユ退治のために散布された薬品が一時的にはブユを退治するけれど、また増えてしまって2回、3回と散布せざるを得なくなる、そしてカイツブリの大量死につながっていきます。薬品は撒いた後しばらくすると水中からは検出されなくなるのですが、プランクトン、それを食べる小魚、そしてナマズとどんどん濃縮されて蓄積されていました。

参加者からは現代の問題として、防砂防風林の松の害虫予防に年一回殺虫剤をまいている、その影響に関するデータはないが、その動植物にどのような影響があるか心配だという声が出ました。松枯れは特に関西の方でひどいようで、松茸が少なくなっているとのこと。実際の松枯れと殺虫剤をどのように折り合いをつけるかが難しいところです。鳥が死ぬなど、目に見える被害があれば人々は注目するけれど、目に見えずに蓄積されていくものにも注意を向けていかななくてはならないのです。

放射能汚染水の海洋放出、米軍基地付近での有機フッ素化合物の排水中濃度の高まり、芝生などへの除草剤（ラウンドアップ）など、『沈黙の春』から60年経った今も新たな問題が次々に起っていることが指摘されました。

水に関して、最近の子ども達は水道水を飲まず、ペットボトルの水だけを飲むようになってきているらしいと言う話が出ました。水以外でも、最近の住宅にほとんど窓がなく、エアコンがないと生活できない家が多いとか、若い人が自然を嫌い、木も落葉があるので嫌がるようだとのこと。自然と全くふれあおうとしない世代への不安が口にされました。

逆に、コロナで郊外に引っ越してきた若い人が自然を楽しんでいる様子も見られるようで、二極化しているのでしょうか。

私たちにできることはしていきましょと、新しく衣類を買う時は天然素材のものを買っている、スポンジはやめてヘチマを使うようになったと報告がありました。できることは少なくとも、やり続けていきたいものです。

最後に、半世紀以上前にコークスからガスを作っていた工場跡地で、現在も土壌に残っている危険な物質を外部に出さないため、流入する地下水をくみ上げて浄化した後に外に放出しているという会社の例が紹介されました。不都合なものは何でも隠してしまう社会の中で、そのようにきちんと処理している会社のあることを知りました。

(文責 小川)